

2015年7月30日(木) 4校目

上演4

千葉県 松戸高等学校

# 「CRANES」

第39回全国高等学校総合文化祭  
第61回全国高等学校演劇大会

## 講評速報

生徒講評委員会 担当委員

山内愛美 (和歌山県立桐蔭高等学校)

藤川彩夏 (京都府立東宇治高等学校)

池藤美波 (広島県立福山誠之館高等学校)

千羽鶴を作っていく中で、それぞれの高校生たちの思いがぶつかりあいながらも一つに繋がっていく劇であった。

物語の舞台は広島のとある高校の生徒会室。生徒会長が平和祈念の千羽鶴の制作を全校生徒に呼びかけたが、8月6日を目前にしても27羽しか集まらず、やむをえず生徒会のメンバーで完成させようとする。

舞台上には「生」や「総」の看板が置いてあり生徒総会を想起させ、実際に生徒会室をみたことのない人にも分かりやすくなっていた。また扇風機や首にかけたタオルなどに季節を感じた。また、涼んでいる後ろ姿だけで、暗幕の後ろに冷蔵庫を表現するやり方にはなるほどと思わされた。

照明では、机の上の折り紙だけに光を当てて強調したり、二人の人物に別々に光を当てて、心情面の対立を表現したりするなど、工夫が凝らされていた。さらに、窓の開け閉めにより蝉の鳴き声の大きさに強弱をつけるなど、細かいところにも気を配り、リアリティを感じさせた。劇の最後の部分を台詞でなく歌うことにより、すんなり内容が入り、心に余韻が残るような工夫がされていた。

戦争を経験していない私たちに、平和について考えさせられる作品だった。心をこめて折る人、他の地域から来て興味本位で折る人、自分の居場所を求めて折る人、罪滅ぼしのために折る人、また、千羽鶴を作ることに関心がない人。その彼らが最後には全員で机を並べて鶴を折ることで、人と人のつながりの大切さが伝わってきた。

上演校は千葉県の高校であるが、広島弁を使って広島の高校生をしっかりと演じていた。そのことが、他府県の高校生にもあらためてこの問題を深く考えるきっかけとなっていた。

歌詞の最後のところに「私からあなたへ、あなたから世界へ」という部分があった。しかし、私たちの中に、広島・長崎の出身の人もいれば、その他の地域の人もいる。千羽鶴の意味を知っている人もいれば、その意味すら知らなかった人もいた。

折ること自体にはもしかしたら意味がないのかもしれない。しかし、たとえ平和への思いが真剣に込められていなくても、平和について考えるきっかけは残していかなくはない、戦争を風化させてはならない、そんな強い思いが伝わってきた。

最近、東日本大震災の苦しみもあまり報道されなくなっている。記憶が受け継がれるように私たちには伝えていく責任があると感じた。

